

東京・春・音楽祭2020

Trio Accord ——

白井 圭 (ヴァイオリン)、門脇大樹 (チェロ)、津田裕也 (ピアノ)

ベートーヴェン ピアノ三重奏曲 全曲演奏会 II



曲目解説

ベートーヴェンのピアノ三重奏曲

ピアノ三重奏曲 第2番 ト長調 op. 1-2

ベートーヴェンの記念すべき作品1には、3つのピアノ三重奏曲が含まれており、1794～95年に作曲されたと推定されている。

3曲のなかでは地味なためか、演奏機会が少ない本曲は4楽章構成。第1楽章は、アダージョの序奏にアレグロ・ヴィヴァーチェの主部が続く。第2楽章ラルゴ・コン・エスプレッシオーネは、展開部のないソナタ形式。落ち着いた旋律美を堪能できる。第3楽章スケルツォの印象的な主題はチェロによって提示され、トリオではピアノが主導権を握る。第4楽章フィナーレはソナタ形式。ヴァイオリンが先駆けてプレストの主題を刻み、澁刺とした喜びを表すように力強く終わる。

ピアノ三重奏曲 第4番 変ロ長調 op. 11 《街の歌》

クラリネット、チェロ、ピアノという特殊な三重奏のために1797年に作曲。今回のようにクラリネットのパートはヴァイオリンで演奏されることが多い。

3楽章構成で、第1楽章アレグロ・コン・ブリオはソナタ形式。ベートーヴェンならではの力強さと優雅さがあり、ピアノも活躍する。第2楽章アダージョは、シンプルなソナタ形式。冒頭、ピアノ伴奏でチェロが奏でる第1主題は「七重奏曲 op. 20」との近似が指摘されている。第3楽章アレグレットは、主題と9つの変奏とコーダからなる。この主題は、巷で評判となっていたヨーゼフ・ヴァイクルのオペラのアリアから採られており、本曲が「街の歌」と呼ばれる所以ともなっている。

「仕立て屋カカドゥ」の主題による変奏曲とロンド op. 121a

作曲年代や動機は定かではないが、1824年にウィーンで出版。18分近くにおよぶ大曲である。荘重な序奏で始まり、アレグレットの明るい主題がピアノによってスタッカートで提示される。そして10の変奏を経たのち、最後は華々しく終わる。主題は、当時ウィーンで人気を博していたヴェンツェル・ミュラーのオペラのアリア「私は仕立て屋カカドゥ」から採られている。

ピアノ三重奏曲 第6番 変ホ長調 op. 70-2

1808年に作曲された作品70は、2つのピアノ三重奏曲からなる。この年は交響曲

第5・6番が完成しており、ベートーヴェンの創作意欲が横溢していた。

緩徐楽章を欠いた4楽章構成だが、前作《幽霊》より掴みどころがないせいか、演奏機会も少ない。第1楽章は、どこか不気味な雰囲気もあるポーコ・ソステヌートの序奏に始まり、アレグロ・マ・ノン・トロツポの主部はソナタ形式。第1主題はヴァイオリンとチェロによって明るく歌い出され、第2主題はピアノによって優雅に奏でられる。第2楽章アレグレットは、ハ長調・ハ短調の対照的な主題が変奏されて繰り返す。第3楽章アレグレット・マ・ノン・トロツポも、大きくわけて2つの主題が繰り返される。第1主題は穏やかに3拍子で歌われるが、第2主題は弦とピアノが受け答えするユニークなもの。第4楽章フィナーレはソナタ形式。長いコーダで最後にクレシェンドして力強く曲を閉じる。